江戸時代後期の『鳥獣図』に描かれたペンギン図

福田道雄*

ペンギン飼育史研究会 〒302-0005 茨城県取手市東 5-4-58

(2019年3月11日受付；2019年12月13日受理)

キーワード：鳥獣図，フンボルトペンギン，ペンギン標本の渡来，江戸時代.

日本鳥学会誌

Japanese Journal of
Ornithology

© The Ornithological Society
of Japan 2020

Michio FUKUDA*. The penguin illustration in a painting *Chōjuzu* from the late Edo period. Jpn J Ornithol 69: 91–95. (2020)

Abstract. In Japan, a large number of penguins is currently kept in captivity. In order to elucidate the reason for this, I investigated the history of the arrival of penguins in Japan. According to “Kinpu”, whole body and partial skins of King Penguins *Aptenodytes patagonicus* were brought into Japan during the Kyoho era (1716–1736) and in 1821 during the Edo period. I found an illustration of a Humboldt Penguin *Spheniscus humboldti* in *Chōjuzu*, which is considered to have been copied by Mr. Magodayuu Kishi. Because he died in 1857 it was possible to estimate the arrival of the Humboldt Penguin specimen and the original illustration, to be before 1857.

Key words: Chōjuzu, Humboldt Penguin, Arrival of penguin specimens in Japan, Edo period.

Study Group of Captive Penguin History, 5-4-58, Higashi, Toride-shi, Ibaraki 302-0005, Japan.

はじめに

日本で飼育されているペンギンは、2017年末現在で日本動物園水族館協会加盟の動物園水族館（一部の未加盟施設も含む）の飼育数が4,253個体で、これに未加盟飼育施設の飼育数、動物プロダクションや個人などの保有個体を含めると、4,300個体以上と推定される。1つの国で、このように多数のペンギンが飼育されている状態は1980年代頃から次第に顕著となり、世界的にも他に例のない状態となっている（福田1997）。

では、なぜこのような状態となったのか、またどのようにしてそれが進行したかについて、ペンギン飼育の観点から検討してきた（福田1997, 2013, 2014, 2019; Fukuda & Kawata 2019）。日本人がどのようにペンギンと関わってきたかについては、すでに青柳（1987）、川端（2001）、上田

（2006）らによって報告されている。しかし、いずれも文化的な側面に重点が置かれていて、ペンギンの渡来や飼育状況の変遷については十分に言及されていない。その中で、ペンギンの渡来史については、なお多くの不明な部分が残されているとみられる。より詳しいペンギン渡来史の解明は、ペンギンがどのように日本に根付いたかに関係しており、上記の課題を系統的に検討するためには不可欠だと考えられる。またその解明によって、日本人が渡来動物とどのように接してきたかを知る一助となるのではないかと考えられる。

これまでペンギン渡来に関する記事として知られているものには、栗本瑞見が『蘭畹摘芳』三編巻之八（大槻1822）、『禽譜』（堀田1831）および堀田・鈴木（2006）に記載した記事がある。それらによると、栗本瑞見の父である田村藍水は江戸時代の享保年間（1716–1736）に蘭船から未知の鳥の全身剥製を贈られた。1826（文政9）年にその頸か頭部分の皮か、あるいはその写生図を江戸滞在中のシーボルトに見せたところペンギンであ

* E-mail: mogufuku@beige.ocn.ne.jp

doi:10.3838/jjo.69.91

ると教えられたことである。そして喙蘭（オランダ語）で「ピングイン」、羅甸（ラテン語）で「アプテノディテス」と記録していた。アプテノディテスはキングペンギン属 *Aptenodytes* の学名で、この属を構成するもう 1 種のエンペラーペンギン *A. forsteri* が種命名されたのは、さらに時代が経過した 1844（弘化 1）年であったので（Peters 1931）、このペンギンはキングペンギン *A. patagonicus* であったとみられる。また『禽譜』には、1821（文政 4）年に「紅毛カピタン」（オランダ人商館長の意）が長崎奉行へペンギンの皮を縫い合わせた物入れ袋を贈ったと記載されていた。その皮の図（本稿では当時描かれたもの全てを図と表記する）が残されていて、種名はキングペンギンと判別できる。その他にも、磯野（2012a）が『蘭畹摘芳』（大槻 1822）に掲載された「異鳥羽皮臆説」から推測して、ペンギンの皮が 1820（文政 3）年に渡来したと記載していた。

同じ江戸時代には、キングペンギンと別種のフンボルトペンギン *Spheniscus humboldti* を描いた図が残されていると記述した著作があった（川端 2001; 上田 2006）。今回、筆者はフンボルトペンギンの図を、それらの著者の記述と異なる史料から見つけ、その図が掲載された『鳥獣図』（南齋 成立年不明）の由来やフンボルトペンギン標本の渡来時期について検討した。ここではその結果を報告し、今後のペンギン渡来状況をより詳しく解明するための資料としたい。

材料および方法

江戸時代のフンボルトペンギンの図が存在することを、川端（2001）と上田（2006）が記述していた。両著者のペンギン図の出典は、川端（2001）が南齋一笑著『諸禽万益集』、上田（2006）が左馬之助著『諸禽万益集（鳥飼万益集）』（三巻）と書いていた。「國書總目録 第四巻」（森末ら 1966）によれば、『諸禽万益集』は 1717（享保 2）年に成立した著者源止竜（左馬介）の三巻三冊構成の冊子で、国内所蔵先として国立国会図書館、東京国立博物館資料館、東京都立中央図書館加賀文庫、秋田県立図書館、西尾市岩瀬文庫の 5 施設が記載されていた。他に同書名で同著者の一巻一冊構成の同名異本（左馬介 成立年不明）が国立国会図書館に所蔵されていた。本稿では、上記所蔵施設の秋田県立図書館と西尾市岩瀬文庫を除く 3 施設の所蔵本を調査した。また「國書總目録 著名別索引」（森末ら 1976）に、南齋一笑は『鳥獣図』の

著者と記載されていたので、東京国立博物館資料館所蔵の『鳥獣図』を調査した。

結果および考察

国立国会図書館（三巻三冊本と同名異本）、東京国立博物館資料館、東京都立中央図書館加賀文庫の『諸禽万益集』所蔵本には、ペンギンの図は掲載されていなかった。一方、東京国立博物館資料館所蔵『鳥獣図』のマイクロフィルム資料（資料番号：と 10749、作者 南齋一笑、年代（江戸末）写）でペンギンの図を発見した。その後、『鳥獣図』のデジタル画像（図 1、東京国立博物館画像 E0097398）によって、図の彩色状態を確認した。この『鳥獣図』は縦幅約 38 cm、長さ約 282 cm の卷子で、冒頭部分に「鳥獣圖」と書かれ、続いて 3 種の動物が描かれていた。各図の上部にはそれぞれオランダ語で Pinkuin（ペンギン、現在は Pinguin）、Kaaijman（カイマン、現在は Kaaiman）、Leguaan（イグアナ）と大きく書かれ、2 番目の Kaaijman だけ、その上にさらに「De Afbeelding Von」（.. の図の意）と書かれていた。そして、描かれたペンギンは卷子の大きさから推定すると 50 cm 以上の大きさであった。

1 番目の図 Pinkuin は標本を横向きに置いた状態で、羽毛や皮膚裸出部の鱗状模様まで精密に描かれていて、羽装から成鳥のフンボルトペンギンと判別できる。この図のペンギンは、体上面の黒色である羽毛が淡茶色と黒褐色の斑状に、黒色の嘴が淡灰色に、ふ蹠上部から趾までの皮膚裸出部が肌色に描かれていて、この卷子自体の退色を考慮しても実物と大きく異なる配色であった。そのため、この図に写生された標本は保存状態の良くなかった古い標本であった可能性が考えられる。例えば、1925 年購入の武蔵高等学校中学校所蔵のフンボルトペンギン標本（高田・白井 2016）は、黒色の羽色が淡茶色まで退色し、嘴の黒色の角質表皮が剥離して、嘴全体が赤色を帯びた肌色となり、ふ蹠と趾の広い部分が灰色近くまで淡色化していて、このペンギン図と類似点が多い。また、足の皮膚裸出部の色については、黒色化した部分より肌色部分の方が広範囲を占める個体を飼育下で見たことがあり（福田 未発表）、それがより顕著となった個体だった可能性もあると思われる。2 番目の Kaaijman と 3 番目の Leguaan の図も詳細に描かれていて、最初の図のペンギンと似た大きさであった。そして、爬虫類の図はそれぞれの注記で「カァーイマン」と「レギュア・ン」の動物名が書

図1.『鳥獣図』に描かれたフンボルトペンギン標本の図（東京国立博物館画像 E0097398 の一部）。

Fig. 1. Illustration of a Humboldt Penguin specimen in *Chōjuzu* (part of Tokyo National Museum Film No. E0097398).

かれ、共に1837（天保8）年に戸川播磨守が長崎から江戸へ持って来たと記されていた。また、両注記の最後に「南齋寫」または「南齋一笑」と氏名が書き加えられていたが、南齋一笑がどのような人物かはわからなかった。なお、戸川播磨守は1836–1842（天保7–13）年までの長崎奉行であった（外山1988）。

この『鳥獣図』には、幾つの特徴があった。まず、オランダ語の動物名が書き込まれていて、通常は1番目の図にあると考えられる「De Afbeelding Von」が、2番目の図に書かれていたことである。このようにオランダ語で動物名などが書き込まれた図は、磯野・内田（1992）、下中（1994）、国立科学博物館（2001）、細川（2012b）に掲載された博物図譜類や、東京国立博物館（2007）が公開する研究情報アーカイブズ博物図譜データベースの動物図類からは発見できなかったため、珍しい形式であると考えられる。次に、動物名が書かれた位置はペンギン図のみが中央上部で、他の2枚図は右側上部であったことである。さらに、ペンギン図にだけは注記がなかった。このことから、この卷子本の構成は統一されておらず、別に作成された爬虫類の2枚の図と、鳥（ペンギン）の図を組み合わせ、「鳥獣」の図巻とした可能性が考えられる。

この卷子のペンギン図の本紙には「貴志文庫」の蔵書印が押されていた。「貴志文庫」とは、西尾

市岩瀬文庫。主な蔵書（オンライン）によれば、駿府町奉行を勤めた貴志孫太夫（別名に忠美、朝嗽）の旧蔵本であった。そこで、貴志孫太夫が生前に残した諸記録をまとめた『朝嗽集』を調べた。すると、全28巻のうちの『朝嗽集』二十（内題朝嗽書画目録）（貴志成立年不明）に320点の書画名が記録されていて、その中に「七拾五番和蘭ヘンクユイン リュクアン カイマン之図 壹巻」が記載されていた。2種の爬虫類図の順が逆になっているが、図の構成は『鳥獣図』と同じ3種の動物名が書かれていて、『鳥獣図』はこの目録に記載されたものと同じである可能性が高いとみられる。爬虫類図の順が入れ替わっていたのは、目録記載時に書き間違えたか、改装時に張り違えたものと考えられる。

さらに、西尾市岩瀬文庫。主な蔵書（オンライン）には、「孫太夫は絵を得意とし（中略）、さまざまな分野について、自らの写生や模写による資料を遺しました」と記載されていたことから、ペンギン図は貴志孫太夫が転写し、『鳥獣図』に組み入れられた可能性を裏付けていると考えられる。また、貴志孫太夫（忠美）書写本の『虫魚草木図』の解説（西尾市岩瀬文庫。古典籍書誌データベース オンライン）には、「蘭書の博物学書の絵図を抄写した絵図集。爬虫類、昆虫、動物、鳥類、植物、魚類等。蘭名を附記する」との解説文があって、オランダ語が図に記入されているという点で

も、『鳥獣図』の特徴と一致していた。以上のことから、『鳥獣図』の著編者は貴志孫太夫であると考えられる。なお、磯野 (2012b) も『鳥獣図』の著者を南齋一笑ではなく、著編者未詳と記載していた。

実際、江戸時代の図譜類に転写が多いことは、磯野 (1995)、国立国会図書館 (2005)、狩野 (2015) で報告されている。さらに、上記の『朝暎集』二十 (貴志 成立年不明) には「八拾三番 ペンケイン之図 壹冊」との記載があり、『鳥獣図』とは別にもう 1 枚のペンギン図があったことを示していた。「八拾三番」の図は卷子本ではなく、冊子に収録されているという点では『鳥獣図』とは異なっている。「八拾三番」のペンギン図の所在は不明であるため図の構成は未確認であるが、『鳥獣図』とは異なる転写図であった可能性も考えられる。磯野 (1995) は転写されやすいものの特徴の一つとして、博物家や絵師がこぞって写した「珍禽希獣の類」を挙げていた。当時はペンギンも、それと同等のものだったと考えられるので、多数の転写図を残した貴志孫太夫の転写対象となったとみられる。

磯野 (1995) と細川 (2012b) によれば、外国産の動物が到着した長崎の出島では、記録のために正確な実写図が作成されていた。そして、出島では下書きや自分用などの多数の図が作成されることが多かった。貴志による転写と考えられる『朝暎集』二十「七拾五番」のペンギン図の原図となったペンギン標本も出島に到着したはずなので、ペンギンの原図 (あるいはその転写図) も複数枚存在したと考えられる。しかし、江戸時代の輸入鳥類についての調査をした細川 (2012a) や、渡来動植物の記事を詳しく調査した磯野 (2012a) からは「七拾五番」のペンギン図以外のペンギン図の存在を知る手がかりは見つけられなかった。

最後に、『鳥獣図』は 2 種の爬虫類が江戸に運ばれた 1837 (天保 8) 年以降から、貴志孫太夫が没した 1857 (安政 4) 年の間に作成されたと考えられる。ただし、ペンギン図が爬虫類図とは別に転写された可能性が高いので、転写図の元となる図に写生されたフンボルトペンギン標本の渡来時期は、1857 (安政 4) 年以前であるという推論に留める。今後は『鳥獣図』で描かれたペンギン図の原図と、『朝暎集』二十に記載された『鳥獣図』の図とは別に描かれたペンギンの図の発見に努め、フンボルトペンギンの渡来状況の解明を進めたい。

本稿に記載したペンギン飼育数に関する情報は、日本動物園水族館協会に開示していただいた。東京国立博物館資料館は、所蔵の『諸禽萬益集』の閲覧を中止していたため、ペンギン図掲載の有無を調べて下さり、また『鳥獣図』のデジタル画像を新規に公開して下さい。『鳥獣図』の注記は小原喜美子氏に解説していただいた。川田 健氏に英文を校閲していただいた。さらに、藤田剛編集委員と 2 名の匿名査読者から多数の貴重なコメントをいただいた。特に、査読者から本稿にとって重要な文献をご教示いただいた。合わせて深く感謝を申し上げます。なお、ペンギンの図は東京国立博物館のデジタルコンテンツ無償利用条件に合致することから掲載させていただきました。

摘 要

日本では、現在非常に多数のペンギンが飼育されている。このような状態になった理由を解明するため、ペンギンの渡来史を調べた。『禽譜』によれば、ペンギンの全身と部分の皮が、江戸時代の享保年間 (1716–1736) と 1821 年に渡来し、どちらの種もキングペンギン *Aptenodytes patagonicus* であった。筆者は、貴志孫太夫が転写したと考えられる『鳥獣図』に描かれたフンボルトペンギン *Spheniscus humboldti* の図を見つけた。そして、その原図で写生されたフンボルトペンギン標本の渡来時期は、貴志忠美が没した 1857 年以前と推定できた。

引用文献

- 青柳昌宏 (1987) 日本におけるペンギンの紹介と渡来。神奈川大学附属研究紀要 (1): 31–43。
- 福田道雄 (1997) 日本におけるペンギン飼育史試論。動物園研究 (2): 30–47。
- 福田道雄 (2013) 日本の戦前のペンギン飼育。動物園研究 (20): 48–59。
- 福田道雄 (2014) 戦前の日本で飼育されたアデリーペンギン。動物園研究 (21): 37–38。
- 福田道雄 (2019) 日本で最初に飼育されたペンギンに関する追加記録。山階鳥学誌 51: 53–61。
- Fukuda M & Kawata K (2019) Penguins in Japanese collections. Zoo Grapevine & International Zoo News (49): 26–35。
- 左馬介 (成立年不明) 『諸禽萬益集』。国立国会図書館書籍 ID: 000007297512 国立国会図書館デジタルコレクション。(オンライン) <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2535820>, 参照 2019–07–31。
- 細川博昭 (2012a) 江戸時代における鳥類輸入の実態について。動物観研究 (17): 7–14。
- 細川博昭 (2012b) 江戸時代に描かれた鳥たち。ソフトバンククリエイティブ, 東京。
- 堀田正敦 (編著) (1831) 『禽譜』。東京国立博物館研究情報アーカイブズ。博物図譜データベース。禽譜: 水禽。No. 146–149。画像番号 H0018459–H0018462。

- (オンライン) https://webarchives.tnm.jp/infolib/meta_pub/G0000002070723ZF, 参照 2019-07-31.
- 堀田正敦・鈴木道雄(編著)(2006)江戸鳥類大図鑑: よみがえる江戸鳥学の精華「観文禽譜」. 平凡社, 東京.
- 磯野直秀(1995)江戸時代動物図譜における転写. 山田慶兒(編)東アジアの本草と博物学の世界上: 299-333. 思文閣出版, 東京.
- 磯野直秀(2012a)日本博物誌総合年表 総合年表編. 平凡社, 東京.
- 磯野直秀(2012b)日本博物誌総合年表 索引・資料編. 平凡社, 東京.
- 磯野直秀・内田康夫(1992)舶来鳥獣図誌-唐蘭船持渡鳥獣之図と外国産鳥之図-. 八坂書房, 東京.
- 狩野博幸(監修)(2015)江戸の動植物図譜. 河出書房新社, 東京.
- 川端裕人(2001)ペンギン, 日本人と出会う. 文藝春秋社, 東京.
- 貴志忠美(成立年不明)『朝嗽集』二十. 国立国会図書館書籍ID: 000010991945 国立国会図書館デジタルコレクション. (オンライン) <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2577910>, 参照 2019-07-31.
- 国立科学博物館(2001)日本の博物図譜. 東海大学出版会, 東京.
- 国立国会図書館(編)(2005)描かれた動物・植物-江戸時代の博物誌-. 国立国会図書館, 東京.
- 森末義彰・市古貞次・堤 精二(編)(1966)國書總目録第四卷. 岩波書店, 東京.
- 森末義彰・市古貞次・堤 精二(編)(1976)國書總目録著者別索引. 岩波書店, 東京.
- 南齋一笑(成立年不明)『鳥獣図』. 東京国立博物館マイクロフィルム, 資料番号: と 10749.
- 西尾市岩瀬文庫. 主な蔵書. (オンライン) <http://iwasebunko.jp/stock/stocklibrary.html>, 参照 2019-07-31.
- 西尾市岩瀬文庫. 古典籍書誌データベース. (オンライン) 岩瀬文庫蔵書 函番号(資料番号) 午 25『虫魚草本 図』. <https://iwasebunko.jp/stock/database.html>, 参照 2019-07-31.
- 大槻玄沢(編著)(1822)『蘭畹摘芳』三編卷之八. 東京国立博物館マイクロフィルム資料, 資料番号: 和 114.
- Peters JL (1931) *Check-list of Birds of the World 1*. Harvard University Press, Cambridge.
- 下中 弘(編)(1994)彩色江戸博物学集成. 平凡社, 東京.
- 外山幹夫(1988)長崎奉行 江戸幕府の耳と目. 中央公論社, 東京.
- 高田 陽・白井亮久(2016)武蔵高中標本庫の鳥類剥製標本-1920年代の採集標本に基づく鳥類の Fauna Musashinensis の作成-. 武蔵高等学校中学校紀要 1: 45-76.
- 東京国立博物館(2007)研究情報アーカイブズ, 博物図譜データベース. (オンライン) https://webarchives.tnm.jp/infolib/meta_pub/G0000002070723ZF, 参照 2019-07-31.
- 上田一生(2006)ペンギンは歴史にもクチバシをはさむ. 岩波書店, 東京.